
the Summer Sea Sky

飛焰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

the Summer Sea Sky

【NZード】

N5451N

【作者名】

飛焰

【あらすじ】

言の葉の森 夏祭り企画小説「夏休み+海+運命のスイカ割り」
化学反応

終業式である。とりあえず今日が終業式でここから夏休みひやつほーいな時期になるわけである。と、いつても期末で赤点をとつた人々にとつてはあんまし喜べない時期なのだろう。この糞暑いなかで熱のこもる教室で……まあ、多少の人口密度は緩和されたとしても各クラスの赤点の勇者たちが一つの教室に集うわけだ……結局のところ暑いんだろうなあ。

だが特に親しい友人がいない方からしたらちょっと羨ましいものである。友人という友人がそんなにいなため夏場に遊びにいくのはほとんど限られる。そう毎日遊んで暮らすわけでもないしこのご時世、我が私立T高校はバイトが全面的に禁止なため特に打ち込むことができるものはない。そうなれば夏休みは怠慢に過ごすだけであつて……。

憂鬱だ。そんな夏をどう過ごせばいいんだ？ 宿題なんて1時間かそこらやつてれば直ぐに終わるようなもんだぞ？ これは定年退職したオジサンがこれからをどう過ごせばわからないという時期に突入するわけであつて……ああ、ダリイ……。

思考の片隅でざわめく教室では俺とは違つて遊ぶ予定とかなのだろう。本当に羨ましい限りだ。暇人はどういう生活を送つたらいいのか是非ともご教授ねがいたいぐらいだ。まあ、どうせゲームとかで夏休みを過ごすのだろう。

それなら新作のゲームでも欲しいんだけどバイトできないし、お小遣いなんてもう随分と貰つてないし、アツイが終わるまで待機だろつ。

暇だ。ほんとに何をしたらいいんだか……。

(悠ひやん、ちょっと悠ひやんつて!)

気がつけば背中を指で突つついて来たのはスポーツ刈りで短い髪の毛をワックスでつんつんにたてた悪友……という分類の友人である、明日川啓輔であつた。その見た目どおり暑苦しい男で出席番号的に小学校、中学校、高校と俺の後ろに常に配置されているいわばストーカーだ。氣だるく先生の話を聞き流していた俺は思考を切り離し、その事に気がつくのは皮肉にも啓輔のおかげで早かつた。

「安里ーー! 安里悠助!」

「あ、はー」

終業式後のLHRで名前を呼ばれるという事は一つしか思い当たる節はない。普段の素行は当たり触りない俺が呼ばれるとしていたら、決まつてることはある。何時ものことであつたので俺が気がつかないのも頷ける。なんか教室が騒がしいと思いながら思考しているそういうこととか。浮き足立つものの興味のないものに分類できるであろう俗に言う『悪魔手帳』の譲渡である。

俺は渋々席から立ち上がり、俺の名前をさつきから呼んでたであらう、大久保先生、どういう訳かあだ名が某カードゲームで有名な神様な巨神兵に近づく。

「をお? この威圧感にスース越しでも伝わる筋肉! これは…
…そう呼ばれても仕方ないんじゃねえか。つか、担任相手に今更な反応か。

「安里」

「は、はい…」

巨神兵の威圧感に小さくなる俺。この先生が補修担当な古文の赤点者にはもうなんてコメントしたらいいかわからねえ。『愁傷様と言えば済むんだろうがこれは？』特に当たり触りない成績の俺には迂闊な真似をしない限り無縁なことなんだけどな。バリカンで自分で剃つたのだろうか？少し荒っぽかったのは日頃のストレスか？

いやいや、気を引き締める気を。今だけ。

「もう夏休み気分か？ 気を引き締めろよ」

「は、はあ…」

言われると分かつていていた言葉に、気の抜けた返事がついつい出る。その俺の気の抜けた返事にオベスクの眼が動いたような気がする。そして、その瞬間に俺は戦慄する。つまりは、死の直感。

内心ビクつきながら俺は成績表を手渡しでもう。正確には、『つかんだ』だ。

「……」

手放さない。オベスクの野郎、放しやがらねえ。これが学校がケチつて毎回のように配つてるペラッペラな紙であつたらすぐ真つ一つに分かれてしまう。それほどまでの表面化の力のぶつかり合い。俺とオベスクのやり取りに笑いが巻き起こる。

おのれ教師め。一人の教師を生贊にする気か？これ以上なにを

望むというんだ？ 生徒一人を生贊に生徒に強い注意を呼びかけやがつて。俺を反面教師もとい反面生徒にしたてあがりやがつて。あこれでボーッとした生徒もこの喧騒で目を覚ましただらうなあ！ 今、机に伏せていた悪魔もなあ……！

「ありがとうございました」

最上級に引きつった笑顔で心にもない事を言つと、オベスクの力が抜ける。俺とオベスクの謎の戦いはオベスクの勝利で終幕した。くそつ、始業式の時に覚えてろよ。担任とこんなやりとりをするなんて、最悪だ。できるだけ目立たない学校生活を心がけてるつていうのに。

最後の最後でやらかしたか。まあ別に構わない、クラスの連中の顔と名前は夏休みを過ごしてるので記憶から薄れる。そんなに親しい連中ってわけじゃないんだ。教壇の目の前、つまるところの中央列の一番前でにこやかに微笑んでいらっしゃるプリンセスとは違つてねえ。つてかにこやかに微笑むつて、『頭痛が痛い』つてのと同じレベルか？

特に頭のよろしい訳でもよろしくない訳でもないでもない俺は一人ちょっとした疑問にぶち当たつた。とりあえず先のオベスクとの戦闘で俺はいい晒し者だ。ここは礼儀を欠かないためにも敗者は敗者なりの態度をとろう。

俺は喧騒の中心であることで、締めに肩をがっくり落とすリアクションをとる。アメリカンなコメディアンもびっくりするような肩の落とし具合で教室の後ろの連中にも分かりやすい動作をする。ねぎらう言葉と冷やかす言葉が入り乱れる場を逃げるよう動くと、ふとした瞬間にプリンセスと目があう。澄んだ目に澄んだ黒い髪。

「ここに居てもいい匂いがしてくるあたり、その前後左右の席にはアロマセラピーにでもなってるんじゃないだろうか？」

どうでもいい思考をしながら特に田を配ることもなく去る。小さく手を振っていた姿は哀れな子羊をねぎらつてるように見えた。そこに俺の反骨精神が猛くいきり立つた。おのれ、確かに芸能界でも食つていけそうな面構えだからつていい気になんじやねえぞゴラア。静かに殺氣を静めた目で振り返ると、俺の視線に気がついたプリンセスはにこやかに笑つて見せた。

「ほ、こいつ……！ 気がついた時には遅い。机の角に面妖なキャラクターを描いてあり噴出しからは『お疲れ』とだけ描かれていた。何者だ、貴様は伊賀の者か？ 甲賀の者か？ 白百合のように清く正しそうな淑女が机に落書きだと？ これで幾人の男という男をたぶらかして来たのか？ 恐ろしい娘！ 珠洲守真澄^{すずもり ますみ}は要注意人物に間違いない。

「明日川！」
「はいはいはーい」

そういうつた数秒のやり取りの後に、すぐさま担任から名指しで呼ばれるのは当然こいつであり、必然的に席に戻るときに出会い頭になってしまつ。啓輔はにやけ面のまま俺に（厳密的にいうとオベスクに）近づいてくる。明らかに先程のやりとりで美味しい餌でも見つけた気分なのである。こういった人をからかう悪い癖は学校生活を順風満帆に送つてゐるコイツらしい。

俺は自身でもわかるくらい不機嫌な面のままで席に戻つとした時に、啓輔が俺の肩を叩きノートを千切つたものを更にコンパクトに折つた紙。それを、オベスクにバレないように手渡す。その視

線は「受け取れよ」というのが染み出ている。俺は奪い取るかのように啓輔から受け取り席に戻ると、机の教科書をいれる陰に潜め開封する。

メッセージは簡単。女の子のようなかわいらしい丸文字にあっかんべーをさせた落書き。内容は一言。

『バー力』

単純にその一言だけが書かれていた。オマケになんかムカつくあつかんべーをした絵が地味に上手いことが余計に腹立つ。憎憎しいと紙を丸めてポケットに突っ込み、そして俺は視線をその送り主に向ける。ん？ この変なキャラクターいましがた見た記憶があるんだが……いや、気にしないでおこう。俺は消しゴムで密かに落書きを消して珠洲守を暖かく見守る。

ああ、そうか女子が度々、黒板で落書きしてたのも見たことがあるな。この憎たらしい顔の奇怪生物がプリンセスが来たものと同じかと考えると、この奇怪生物は腹黒いらしい。

「お前はさつきは労つといて、馬鹿よばわりか？」

小さくそう呟くと、丸めてポケットに突っ込んだ手を出す。そして向かう視線は一直線。こんな物を寄越すのはアイツ以外に考えられない。視線の先にいるショートボブで中世的な顔立ちの女子が俺に向かって手を振つてくる。私立であり、ある程度校則の厳しい我が校で唯一茶髪という異端児だ。理事長の娘という事で黙認されるらしいんだが、それが事実かなんてのはどうでもいい。

中学時代からの友人で成績優秀・運動神経抜群・才色兼備という

要素が揃つていながら活潑のことなど、俺とは真逆の人生を生きる奴だというのに、俺によく絡んでくる物好きでもある。今では俺の憎き敵である。この、人を指差し隠れながらケラケラ笑う光坂桃香（もか）という人物は。つられて光坂の周辺に座つて連中も笑いがこみ上げたらしく鼻先で笑つてるのが俺の眼鏡で矯正された目で捉える。

眼鏡の位置を直して怒りを押し殺して平静を取り戻す。

そして、光坂を再び睨み付ける。今度は俺の視線に気がついたか、数年も似たような体験をさせられた俺にしかわからないようなアイコンタクトを送つてくる。それを訳すと『注意力が足りないぞ、ムツツリ助平』らしい。

（誰が助平だ、誰が……！）

怒りを押し殺せず小声でつぶやく、と

「あれえ悠ちゃん？ ムツツリって認めるんだ」

成績表を持つて帰つてきた啓輔の奴がいた。玩具を見つけたような眼をしぐさつて……！ 俺はムツツリでもムツロウでも助平でもなんでもない！ なぜ、あの人の名前がとっさに出たのかは謎だが……とりあえず俺はノーマルだ。隣のクラスのオールバックみたいな幼女趣味などはまったくもつてない。

だが、その前にこの短髪をどうするべきか……。俺は啓輔の抹殺計画に思いを巡らせる。

「そういうや、すずつちとなんかやり取りしてたけど？」

「ああ、プリンセスは伊達じゃないってわかったよ。してやられた」

席に座りなおし啓輔はとも面白そうに笑い出す。俺は担任が成績表を配つてゐるのをいいことに後ろに向き直り啓輔と談話を繰り広げる。互いに成績のことにつれて触れ合わないのは小学校時代からの腐れ縁もあるのである。だから食いついてきたのはプリンセスとの瞬間的激闘だ。担任との我慢比べで争つていたことよりも啓輔としてはそつちのが重要なのである。まあ、俺としてはどちらも面白くない話題だ。

だから思つたことを適当に纏めて終わらせる。自己共に認められてるが俺は利己的らしい。それがこういう時に浮き彫りになる。自分が話したくないことは話さない。あのリアクションだつてクラスの和みたいなものに馴染むための自演だ。下手にあそこでリアクションをとらないよりは心象はいいであろう。

「むう、でも男子生徒は数名は敵に回しだらうな、あの微妙な間は」
「うつせ、プリンセスの横顔に見惚れてたつてことでいいだろ？」
「そんな男子は多いんだし」
「まあ反論はしないし」

「まともに言つても無駄か

リコ王つて利己主義の王か？ そこまで利己主義が激しいわけじゃない。ただ自分の優位に立てるなら要らないものは捨てるだらうな、容赦はせずに。それは認める。

「いやいや、返つて座じまれるよ？ あーちゃん

「あーちゃん言つたな、光坂」

ヒソヒソと会話に参加して来た茶髪の娘の頭を小突く。頭を抱え込んだ茶髪は放つて置くことにする。まあ、昨今までプリンセスの

フルネームすら知らなかつたからプリンセスに興味のない男としてはクラスで黙認されるだろ。男の狂つた嫉妬と愛憎にまみえながら勝ち取るだけの価値はあるのは認めるが……。

待てよ、逆にそういう事で纏まつてしまつたら俺はその戦争に何も知らずに迷彩服とサバイバルグッズだけを持たされて戦火に踊りに来てるつてことなのか？ 魄い男の争いに傍観決め込むつもりが観客席から落ちてしまつたのか？

「新参者は即刻潰されるらしい」

「夏休みに入つてよかつた」

俺は普段は夏休みになつても持ち帰らない上履きなどを持つて帰る事を硬く心に誓つた。

そんな本気の弦きに嘲笑が巻き起こる。それからどう発展したなんか思い出せないような会話に花を咲かせて光坂が呼ばれた辺りから啓輔がため息を漏らしながらプリンセスささまを見る。成績表を受け取つた光坂はプリンセスとにかく成績の話題で盛り上がつてた。2人とも皮肉も込みで美形であるから男子はとくにあの2人に憧れてるらしい。俺は特に思うことはないが、静かになつた啓輔から意識を切り離す。すると、プリンセスや光坂と一時的な別れに悲観的になつてゐる男子の会話が成績という興味のない話題を避けていたら耳に入った。

自分から何でも誘えればいいのに。ここは校則も厳しくてバイト厳禁なんだから暇はいくらもあるはずだ。俺は若き少年の恋バナに心から呆れる。すると、全体に悪寒が急激に走つた！

「ううう……！」

体をビクつかせ椅子が派手に動いたため不快音を鳴らす。そして一方的な殺意の眼が俺に集中砲火させられる。状況の整理もできな
い不可解な出来事を理解するためには、某菓子屋のマスコットみた
くベロをだして格好で有名な少女の真似をする奴が、爆笑してい
る啓輔の近くにいた。

「」、ここつまさか……！耳に息を吹きかけたのか！？

「て、てんめえ」

「そーいうとこ抜けてるのは悪い癖だよ。あははは」

声を弾ませながら喜ぶ光坂。今日は厄口らしく。

今日とこ「」が早く過ぎること願った。この夏、最後の学校
であった。

* * *

想像以上だ。

「暑いな」

「ああ」

「ぞおおだあなあ、あ、あ、あ、あ、あ、」

俺と、オールバックにし後ろで髪を結んでる一見少女にも見えなくもない程の身の丈の少年こと、式水宗介が机を囲んで座る中で、この真暑い時に啓輔の阿呆は扇風機をあたかも我が物顔で独占し、小学生みたいな馬鹿のよつた事をする。阿呆はもう阿呆だ、阿呆なら死んでしまえ。ああ、暑い時は人間のストレスは溜まり易いっていうが……啓輔死ねばいいのに。

宿題をやひうとこう事で我が家に集った宗助と馬鹿は前半は黙々と進めていたものの、室温30度を超えてるのではないかというのを感じ、更には湿度でダウンし現在に至っている。シャツが背中に張り付いて気持ち悪い。

なによりも、この街は海に隣接し貿易の拠点ともなっているような場所である、風は水つ氣を含み重たく感じ、微かには潮の香りもする。昔は近くの遊泳できる浜で遊んでいたものである。今となっては懐かしい思い出の一部。この時期には海の家も出てくるほどで、多少の観光にもなるようなもんだ。

とじあえず、馬鹿は無駄に馬鹿で死ねばいいのに……。

「ちよつと啓輔、暑いのはみんなおんなじなんだから退いてくれない？」
「むしろ死ね」

「お前存在そのものが暑苦しいから今すぐ俺と宗助にアイスでも買ってこないか？」

「ちょ、お前らー？ それでも親友！？」

お前は悪友で宗助は親友だ。いや、宗介みたいな重度の幼女に対し愛を抱くような奴を親友とは断じて認めたくはないかもしがれど、そう付け加えるのもめんどくさいんで俺は啓輔の扇風機独占か

ら脱出するために、扇風機の首振りをオンにし部屋に行き渡らせる
ようになる。とりあえず馬鹿は文句すら言ひ気力が先程のツッコミ
で消えうせたらしい。死ねばよかつたのに。

「ああ、駄目だ。暑いとどうもイライラしてしまう……。えっと、
これは解の公式を用いて計算するからあ……えっと……これは虚数
になるわけで……。」

「ねえ、幽助？」
「誰だそいつ」「
「こう暑いと集中もできないね」
「無視かコラ」

計算に集中していた俺に割り込んでくる。某靈界探偵だったかな
んかの名前をだしやがって、気は確かなのか？ そう思い宗介を見
ると、机に伏せたままの宗介はつづらつづらと語りしていた。よほ
ど重症みたいだ。最初は終業式の話題で花を咲かせていた時とはえ
らい違ひだ。

俺と啓輔が青い春を送る中で、名前の最後が『すけ』になるつて
事から始まつてなんだかんだかで気があつてきた友人である。俺み
たいな利己主義を疎まざに面白いと受け入れた男だ。さらに強烈な
までのサディストで自分の聞きたいことがあるのならば根堀葉堀と
話させられる。よつは互いに対等な付き合いをしてるわけだ。

随分とダラけてる宗介を茶化してやろうと、宗介がとりかかつて
いた数学エエの宿題を覗き見する。決して俺がまったく問題欄を埋
めてないからではない。問11の解答をすでに終わらせていた。最
終問題でもあり大学の試験にもでるとおぼろげな記憶で先生が言つ
ていた難問である。

「……」

数学が得意でもう終わらせたからって仮にも親友に見てくれたつていいじゃないか。こいつに友情つていうのは考え方である。啓介は途中まで取り掛かつていた英語エッセイを捨て今では扇風機を独占してると、眞面目にこの勉強会をやっているのは俺だけか？

なんか、悔しい。いや、ここに必死でいた方が後でヒヒヒイなるよりは妥当か。

「まあ、といつても宿題をやらんと俺らでは宿題のプリントをなくして一日の半分を夏休みで荒らしに荒らした部屋で捜索しねえといけなくなるからなあ……」

「うつ、確かに夏休みは暇で暇で、部屋がすき放題になるけど……」

「と、いってもこの暑さじやなあ……」

「身がははこらなこよね……」

以前と発破しきれなかつた宗介は啓輔の嘆きに便乗するかの如く、机に伏せながらプリントを汗で点々とした水滴をつけた。そして、すでにどーでもよくなつてきた俺は、先ほどの誓いも関係なく机にダウンする。昼といつこともあり空腹も相まって……ああ、もう干物にでもなりそうだ。リアルに脱水症状起こしてもおかしくはねえぞこりや？仕方ない、すこしダルいけど氷り入れたお茶を持つてくるか……。

渋々と立ち上がった俺は軽い立ち眩みをする。ああ、脱水症状か……はやめに水分を補給しねえとなあ……。啓輔にはとびつきり熱いお茶を、いや、そんな熱いもんを作るのも熱くていやだし普通にしどいてやるか。命拾いしたなこの野郎……。

部屋を出る用件もあんまし話つのもめんどくさいんで一人で勝手に出て行こうと部屋の扉を開ける。するとお盆に冷えてそうな麦茶入りのコップを運んでくる我が妹を見つける。コップの数は3つでちょうど俺と宗介たちで数が合つ。

俺の視線に気がついてか、シンテールを元気よくパタパタさせて近寄ってくる。歩行することによって団扇の機能にもなりそうだな……いや、ならないだろ？

まあそんなことばらでもいい、お茶だお茶。

「おーわりいな凜」
「じん

お盆からコップをひとつ奪い取り一気に飲み干

「あああああ……」
「んつ！」ふう！？」

マイシスターの絶叫により盛大に麦茶が気管に入り咽ってしまった。妹のなにじやがるこの糞兄貴という無言の威圧感を受けながら俺は数度、咳をしてから息を整える。前に、当然のことながら凜の華麗な細身の足から繰り出される熊すらノックダウンするであろう強力なキックが俺の脛に見事に

「！」のボケ　　……
「あぎやああああああ！」ふうげほ！？」

叫んだら咽た。手から落としそうになつたコップを割つたら後々が面倒ということで瞬時に体を、痛めた足でそのまま直撃落下コー

スから反らす、よつて全体のバランスを崩した俺は脚をもつれた無様な姿のまま尻餅をついた。なんとか爪先であてて力のベルクトを反らした俺は一安心したのも束の間、激痛が襲う。

「どうしたのぉ、凛ちゃん」

「どしたの、悠助？」

扉を開いて顔を出したのは宗介と、それから凛の部屋からもで、「じ近所づきあいで高校では別の学校であるが最近疎遠気味にはなっているが世間体では幼馴染という間柄の……って、なんで古郷がいるんだよ？ つうか、いてえ……！ これはめっちゃいてえ……！」

折れたかもしれないぞ「これは？」いや、確実にヒビは入っただろう？ ああ、もう考えがおいつかねえ……！

「熊殺脚に……のうおおおお……」

「まつたく、これだから兄貴は……！」

謎の熊の闘氣を放ちながら仁王立ちの我が妹は実の兄を容赦のない蹴りで踏みつける。冬眠中にいらっしゃいした旅人を轟るかのように蓄えを増やすために熊は目を輝かせ俺をひたすらに攻撃つて！ まで！ 兄を蹴るな！ 蹴るんじゃない！ これでも兄だぞ！？ 2歳上だぞ！？

「ははあくん。さては悠助？ 凛ちゃんたちの分のお茶を飲んじゃつたね？」

「あ、あれは凛たちの分だつた……、のか？」

ああ、だからこんなに怒つてるのね。自分のいい方に解釈した俺が間違ひだった。

「それをぬけぬけと……」

「ま、待て！ 話を聞け！」

「それは悠ちゃんが悪いよ……」

「悠助が悪い」

「よくわからんが、死んだほうがいいぞ？」

「あははは、バー カバーカ！」

ゲシゲシと、俺を蹴りながら凛。

身を低くし急所の首を両手で防ぐ俺。

古郷の多少、遠慮の入っているが否定の言葉。

ぶつた切る宗介

ふざけんな啓輔の分際で。

騒ぎを聞きつけてか、光坂が指を向け高らかに……ん？

「な、なんでおめえがいるんだ！？ 光坂ア！？」

叫んだ後に思い出したんだが、「コイツは一応妹の先輩にあたったんだと、母校に在学する妹を思い出して納得したのは黙つてよう。みんな俺がそれを忘れてたなんて露とも思つていないからだ。

* * *

なんでせまつくるしい部屋に全員が集合しているんだ？ そして俺は当然のごとく上座をさせられているのだろうか？ そんなに制裁が足りないのか？ 兄をなんだと思つているんだよ。

ああ、くそう。

「悠ちやんは昔から思い込みが激しいんだからそういうことしたら
駄目でしょ？ そういうのはちゃんと許可をとつてからじやないと
…」

なんで古郷が説教してんだ。

そういうこいつ昔から説教癖がなかつたか？ いや、それを差し
引いても古郷に説教を受けるなんて納得できるか。そもそも人口密
度がおかしい。なんでこの部屋に6人も入つてるんだ。3人でそれ
なりに過ごしやすい広さだつてのに……！

（あんな幼馴染がいるつて大変だねえ？ 悠助）

（そういうならもらつてくれ、宗介）

（悠助、君は世の中の半分の男性諸君を敵に回したよ？ 僕も含め
て）

（俺もお前の敵だぞ）

肩身を狭くしてゐる男群集のヒソヒソ話しを繰り広げる。つてか、
俺に幼馴染がいるのは啓輔のやつは知つてるだろうが。でもそれは
形だけであつて俺とはほとんど疎遠になつてゐるのも啓輔は知つてい
るはずだ。中学時代に何度も教えたはずだ。

凛のやつは昔から古郷にべつたりだつたから今も仲がいいらし
いが……。断じて俺と古郷にそんな関係はない。と、いうか俺自身
が否定したんだ。幼馴染の男女なんて所詮はそんなもん。他に仲が
いい友人が出来たらおのずと係わり合いは失せる。

いつまでもまだるっこしい関係があるのはいらない誤解とかも産
む。だから古郷とは縁もしつかりと切つた。と、いつてもそれは俺
だけの話であつて凛とは係わるな。とかなんて言つてないし別に家

に上がりこんでくるぐらには構わないが……。

「悠ちりやん、聞いてるの？」

金の切れ目は縁の切れ目なら、時の切れ目は友の切れ目。
もう別の道を歩いてる無関係な隣の住人が……何様のつもりなんだよ。

「悠、ちりやん……？」

俺の怒気を察してか。さつきまでの捲し上げてた面影はなく、なにかに怯える小動物のようになってしまった。この空氣を悟った凛は立ち上がりうとすると、それは事情をよく知ってる光坂が遮る。でも、光坂が凛を押しとどめることに意外なものを見し切れなかつた。俺はゆっくりと視線を古郷に戻す。

そういえば、こいつと縁を切るときになんて言つたけ？

もう思ひ返しながら口は動く。

「お前のウザイとこ嫌いなんだわ」

そう、別れ際に俺は素直にそう言つた。今まで溜め込んだ思いをぶちこめるために。なんで、そういう事をする必要があつたか？記憶を探つてもあいつのその時の顔は思い出せないでいた。たぶん、似たような顔をしてたんじゃないのか？ セミロングの軽くカールをさせた自慢の相変わらずの髪型。こいつはなんにも成長しない。

「こつまでもガキじゃないんだ……」口は、

「なあ悠ちゃん？」

「空気を読め、啓輔」

ビシッとモリと強く言つてやろうと思つたとき。となりから何故か俺と同じく正座をしていて足が痺れたのだろうか？ 足をもぞもぞとさせる不気味な生物は話に割り込んでくる。となりにいるため、この人口密度なり湿度なり、今日の最高気温である37℃ だつたりで限界が近いらしい。

つていうか、悠ちゃん悠けやんつて、どいつもこいつも……。啓輔が悠ちゃんつて言つようになつたのも古郷のせいだ。なんかどうもいい怒りがふつふつとわいて来るが、啓輔の空気の読めなさで氣分が殺された。

これ以上、追い詰めるのはやめておいた。こまさらあほらしい。俺とこいつは無関係じゃないか。関わることすでに意味をもたない。やがて俺の怒りの矛先が別に向けられたのを感じ取った光坂は立ち上がり、凛に話しかける。

「凛ちゃん 私たちも宿題があるんだし行くつよ」

「あ、はい」

凛からの殺氣のこもつた視線は気にしてない。自己中心的なのは理解してるし自覚もある。そもそも利己的に動かないで回りに気を配つたりいい顔する奴は馬鹿だと思う。それが自然に出来る奴は正真正銘のバカだとも思う。回りを気にしてばかりなんて疲れる、自分は自分のためだけに動けば十分だ。

他人のために動けるならより自分のために動く。それが当然のことじゃないか。

無言で出て行つた古郷がドアを閉めるのを確認すると俺は姿勢を崩すと宗介の非難めいた視線が突き刺さつた。漫画やなにかでいえば口を逆さにした半円球のようにジト目で俺を見てくる。呆れ半分といった所だろうか？ 元から辛辣な性格をしている宗介である、古郷に対する対応に物申そうとしたげで、あるがもう半分には諦めの表情が伺えた。

周囲から辛辣と評される俺と、宗介がから汲みとめれる表情。

「悠助がどう転んでも利他主義には田覚めないと思つてたけどねえ
「わるかつたな」

俺はその皮肉めいた言葉を受け流す。宗介自身もそれを望んでいふはすだから。やつやつて適当な返事で返す。

「いい加減に許してやつたら？」
清海ちゃんのこと

口を開いたのはベッドで大の字に寝そべつていた啓輔が身を起こして言い出してくれる。宗介は疑問符を浮かべた顔をしている。啓輔はというと奴の心配をしてるようだ。あいつもそう馬鹿ではない補習がいやだつて理由で教科書を丸暗記し今では学年トップの座を永遠の物にするあたり、並外れた記憶能力と応用力が身に備わつてることが伺える。当然、あいつの記憶力では俺よりはあの事を覚えてるに違いない。

「清海つて……、ああ……悠助の幼馴染」

状況がやや追いつかないらしい宗介は品定めするような釣りあがつた目で啓輔を覗き見る。いかにもいい加減そうな顔をしてる事に宗介は訝しげな目で俺を捉える。どう反応していいものか思案する俺よりも、先に啓輔が動いた！

「実はな晴海ちゃんが…」

喜色満面。それを体言するような顔で俺よりも早くに啓輔が口を開いた。一足遅れた俺はその事実を言わせてはたまるかという一身で動こうとするが急に立ち上がったために凛の攻撃やら夏バテやらで立ち眩みを起こす。

それが、決定的な敗因であった。

スイッチの入った宗介に数学の宿題と引き換えに俺の人生の汚点を話すことになった。

* * *

「よお、啓輔」「
「悠助め、古来より悠助というほうが悠助なんだよ悠助」
「啓輔か？ 古来の定説にばかり縛られる啓輔なのか？ 残念な啓輔だなあほんとに」
「悠助すぎて呆れるよ悠助」「
「もう馬鹿馬鹿うるさいよ、悠助に啓輔」「
「なんだと？」 宗介」「
「宗介はお前だ、宗介」「
「おっはよー、さんばか」

「 「 「 なつ …… 」 」

照りつける太陽に焼けるような砂浜。鼻につく潮の香り耳に心地よい清涼音。湿った微風は息を大きくすうと少しだけむせ返るような重たい感触がした。そんなこんなで現実逃避を続ける俺らの肩を叩いて来たのは紛れもなく、光坂桃香であろう。

白い半袖のパークーを羽織つて朝っぱらから元気爽快なのが伺える。能天氣というかなんというか、別に泳ぎにきたわけでもないのにしゃいで楽しいのか？

夏休みで暇をもてあます俺らに啓輔の叔父さんが夏に経営している海の家のヘルプ……とは、名ばかりのバイトを頼まれたそうだ。校則に違反する上にこの時期の海なんて人の集まる場所に、そして地元の高校の連中が集まらない訳もないのだが、バイト代はでないという無鉄砲なことで（実は啓輔に前払いしてもらっている）通そうといふこといらしく。

俺は最初は反対したものの、啓輔が先に話をつけてきた凛に宗介、光坂に古郷という面子は一言で返事を返したという。実際のところでしようがなかつた訳だし宿題も残すは昔ながらの読書感想文だけなので総合文学の科目を得意とする俺はとくに苦でもないため話を請け負つたのだ。

なにより光坂は理事長の許可を貰つたといつので心配な面はなくなつたというのが大きい。

すこしお日働くには多いバイト代も貰つていてのことだし、夏休みを有意義に過ごせる時間もある。軽快に先に進んでる光坂を見送る俺らはお互いを見ながらなんともいえない空気になる。無言のま

まあ互いに明後田の方向を向きながら歩き始める。

「しつかし……、清海ちゃんも呼んだのによく来たなあ？」

その沈黙を破ったのは古郷を誘つたであろう「啓輔だ。色めきたつ声が海水浴場に響く中でさつきの沈黙を一蹴するには十分の話題であつた。無駄に明るい啓輔の声に意図を汲み取つた宗介が介入していく。わかつてた、こういう話題になるのはわかつてたんだ。

俺が光坂の事が好きだという黒歴史を古郷が光坂に口走ったことは。

青春まつ盛りの学生が食いつかないはずがない。中学時代の俺は今とは違つてまだ少しばかり仲がよかつた頃の話でしかないし、過去バナに花を咲かすほどよろしい過去はない俺の唯一の汚点であり、話題のオカズといつても過言ではない話だ。

要約するなら触れられたくないが修学旅行などで根掘り葉掘り聞かれる、笑い話になる出来事だ。まあ、古郷はこの一件で俺と縁を絶たれたもんだと考へて居たと思うが、実際は幼馴染つていうのはその頃の不安定な時期には重しだつたんだ。

ようは間柄を勘違いされる。それが非常に煩わしかつたから俺は、『学校では話しかけるな』ときつく言つてしまつてそれが改善修復が不可能なだけだ。別にあの説教癖のある幼馴染とはよりを戻そうとはあんまし考へて居なかつたが、これは少しい機会かもしれない。そう思つたからバイトに来たとも言える。

それが、俺を利己主義利己主義と、啓輔が言つてくる元凶にあたる。

「悠ちゃん？ いきてるかー？」

「ん？ あ……少し考え事してた」

「清海ちゃんのことも考えて仲直りしようって？ ハハハ、悠助がそんな利他主義には目覚めないか」

「うら若き男女が6人寝泊りして働くんだよ？ 何か期待してたりねえ」

好き勝手いいやがつて……。確かに古郷のためなんかではない。それだけは確証がある。いや、というより古郷が仲直りしたいのか……？ 昔のような関係には修復はいまさら不可能だし距離をもう一定以上お互いがとつてあるから別にどうだっていいだけで……。

結局はどうでもよくなつたから仲直りしよう。そういう最低な考えが古郷のためになるわけがない。ただ俺が ん？

俺が、なんだ？ 別に仲直りしていいことがあるのか？ いや、ないだろ？

「バーロ、ホテルに泊まるわけじゃねえんだし一通り済んだら解散だろ？」

「ちえー、こうこうのつてつまんないよね？ 悠助」

同意を求む宗介の頭を小突く。変な思考を振り払い意識を会話に集中させる。

俺はいつもより大きめのリアクションを、アメリカ人が肩をすくめたようなテレビかなんかで見たようなものを真似てみる。いつもリアクションと違うことを疑問に思わなかつた啓輔は能天気な笑いを宗介に向ける。海は人を少し解放的にするらしい。

そう、きっと俺が仲直りなんて考えたのは海に来たからだと納得する。

「うるさいなあ…」

わざ、ぶーたれる宗介をよそに俺は海の家に向かって歩く。

「でも、女子に日焼け止めをぬったくりたいよなあ…」

俺と宗介は無意識のうちに首を縦に振っていた。

* * *

「叔父さん、交代来たよお」

先に来ていた凛と古郷の視線がこっちに注がれる。お客にバレないようの一安心したように息を吐いた。古郷はともかく凛は初めてのバイト経験でもあって疲れただろう。俺は肩を軽くたたいて激励すると、田は『もう少し早くきやがれ糞兄貴』と言っている。人目がついてなかつたら脛を蹴つていたところだが俺は気がつかない振りをした。

そういうえば先に来ていたはずの光坂がいない。道に迷ったか？

「凛、光坂は？」

「桃香さまはお客さんを呼び込みにいったよ

「ふうん」

凛は光坂をさま付けで呼ぶ。まあ従順なシモベとなり進学に役立たせる気なのであらう。凛の第一志望が俺が現在通つてゐる高校だ。偏差値もそれなりにあり凛の現状は厳しい段階である。もともと俺がここに通つてゐるのは家から近いこともあるが、とくに進路希望がなかつた俺はパツと思いついたのが在学してゐる高校である。

俺は適當な相槌をうつと凛はそそくさと店長、啓輔の叔父さんの場所に戻つていく。

鼻腔に焼きそばの独特な香りが食欲をそそる。もう11時だ、6時から準備してた凛たちはよほど空腹だったのだろう。少し表情筋が緩んでる。古郷もなんとか保とうとしているのだが、眉がぴくぴくと動いて面白い姿だ。

朝の内に来た2人が海岸の掃除や、海の家の戸や窓を開けたりさまざまなセッティングをしてくれたから後は客をさばいて片づけをするだけ。だいたい17時には店じまいをすると言つてたので片付けは全員でやるとして今日は遊べそうにない。満足も毎時で多くなつてるから早々に代わつたほうがいいだらう。

「内容は昨日に話した通りだから、わからないことがあつたら午前に働いてもらつた子たちに聞いてね」

頭をタオルで縛り褐色の肌にノースリーブのシャツをはいた細めで優しそうな印象を与える筋肉がオーリスクに等しいと思われる、啓輔の叔父さん俊一さんが手早く仕事の内容を言つ。内容は昨日に聞いたとおりで非常にわかりやすい説明だつた。最後の確認に昨日と同じ内容だよつてことは間接的にこうなる「仮の顔も三度までだから一回は許すけど…」である。ようは糞忙しいからさつさと

仕事を覚えろよ。でもある。

過去に湘南を制覇した族のヘッジである俊一さんからそんな気配が漂つた。ちなみに古郷のお父さんとつちの母さんはその族の構成員だつたらしい。ちなみに言うが湘南は母さんや古郷の叔父さんの地元でもなんでもない。ただ、とある漫画に影響されてと言つてたのが印象的だ。

計り知れない行動力、俺は母さん（あなた）に似なくてよかつたです。

まあ世間体的に楽と思われてる海の家のバイトだ。適当に密せばけばいいとだけのそんな軽いノリのまま俺は挑むことにした。人生ではじめての社会勉強もある。海で働くなんて逆にラッキーと考えて心に余裕をもつていこう。少しでも余裕を持たなければやつてけない。そんな感じのが先に働いていた凜たちで痛いほどわかつた。

「悠ちゃん！ そのテーブルじゃなくて反対の」

「はい、パラソルの貸し出しですね？ それではこちら！」

「はい、焼きとうもろこしだきたよ！ よろしくね」

「啓輔！ 浮き輪の空氣たのむ！ あのピンクのイルカの奴！」

つまりこの、余裕がないことはわかっていた。

入れ替わりは一度のこと毎時。そともなれば客足のペースもはやり、なによりも炎天下の中であわただしく動くのは非常に体力を消耗する。それに浮き輪やピーチパラソルの貸し出しも毎食のついでに行つから店内は必然的に人数が少なくなつてくれる。

さうにはしつこいナンパ男にも店員から口をださないといけないらしい。いまの所そういう姿は見られないが俊一さんから言われた任務を遂行させなくては俺の身が心配になつてくる。主に母さんの鉄拳制裁は凜の蹴りの比じやないだけだ。鯨を氣絶させたという噂まで流れている。本格的に人間をやめてるとしか思えない。

あくまでも噂であるらしいのだが、俊一さんに前に聞いたとき『あれはすごかつた…』と、残した。それは、あの時に飲んだ酒が言わせた幻だと信じてる。じゃないと俺は人を信用できなくなつてしまう。ただでさえ自他共に認められてる利己主義だ……身の安全が第一に決まつていてる。

しかし、古郷は呼び込みをしてるんだよな？　この炎天下の絶好の海水浴日和で大丈夫なのか？

あ、いや……凜がまわりにいるだらうから大丈夫だよな。どうせゴマをするためにドリンクでも持つていただろう。今は田の前の仕事に専念しよう。頃合をみて啓輔あたりに呼び込みをさせたほうがいいか。昼時だし女が呼び込んでた方が集客率はいいだらうし、昼が過ぎたあたりに交代をしようか。

「悠ちゃんー、スナック菓子適当に500円ぶんくらい見繕つてだつて！」

「わかった。少々おまちください！」

声を大きめでやり取りを行う。俺はフランクフルトやカキ氷などと平行してるスナック菓子を適当に500円ぶんを見繕つ。250円～100円までのがあつてお客様を見て対応する。4人連れだと啓輔が指でコンタクトを送ってきた。俺は指を4本だしお客さんにバレないように確認をとると、グーサインが出た。

100円代のお菓子を5つ持つてレジへ向かうと会計をパッパと済ましてお金をもらひお釣りを差し出す。そういうた当たり前のやりとりをして、いろんな作業をこなしていく。お客さんが出で行つたらすぐに入つてこれるようテープル吹きやトレイの後片付け、それから先ほど言ったような作業を繰り返していく。

昼食をとらずに働いていつた腹にはだいぶこたえた。

それを尻目に美味しそうに焼きそばやフランクフルトなど、焼きとうもろこしひか香ばしい香りの中必死こいて働く。飲食業は結構マゾい仕事かもしれない。光坂も顔の造形はいい方だ、どつかのプリンセスにも引けをとらないほど男子には人気があるしな。それよりもプリンセス、珠洲原（珠洲守です）かあ……確かに、やっぱクラスは同じでも無駄に世界は狭いと評されていても所詮は夏休みになれば無関係な存在か。

元々、住む世界だつて違うんだ。

「あれ？ 珠洲守さん？」

世間が狭くとも、世界が近いわけじゃ いや、訂正。世界も案外狭いもんだ。

少し疲れた顔をしてる珠洲林（珠洲守です）と数名のクラスで見覚えのある顔が来ていた。落ち着ける場所で安心でもしたのか？いや、大方の予想はできた。

「えつと、式水くだっけ？ 隣のクラスの
「へえ……。案外やるんだプリンセス」

隣のクラスでそんなに親しくない宗介の名前をしつてるプリンセスはやはり我が校のプリンセスに恥じないものだった。そんな中で俺はおでんをお客に出てきたところで俺は割ってはいる。宗介め、サボる氣だったな。

「3名をまでようじいでしょうか？ お席のほうへ」案内いたします

」

俺は比較的かつ俊敏に接客をする。それに宗介はこれが危険な行為だということをわかつちゃいない。なんてたつてバイトが禁止なのだ。先生に報告されるなんて脅しを食らった日には俺らは明日は学校で補修対象の処分になるかもしれない。故に俺は顔を引きつたままの他2人と気がつかないが、どこか腑に落ちない顔をするプリンセスを案内する。

俺の冷や汗で状況を察した宗介は慌てた顔で水の準備に向かう。いまだ注文とかに追われる啓輔にもうしばらくの辛抱だとエールを送ると、小さな悲鳴がひとつ。後ろの案内していたプリンセスと名もなき少女一向だ。

「人のところのお客さんとらないでよねえ、さあ、行こうよ」

金髪のガラの悪そうな男が珠洲木（珠洲守です）の腕を掴んでいた。小麦に焼けた肌、見事に割れた腹筋、体中のピアス。なんだ、これは？ 人類なのか？ いやグラサンぐらい外せよ。つてか、人のところの客……？

「ちよ、ちよっとー お断りしたはずですー！」

ああ、なるほど。事態の全容はそういうことか。声を荒げるだけでさえた目を引くプリンセスは余計に注目をかき集めた。やばい、ここで問題を起しあれては客の信用にもかかわる。セーディングした者かと考へると、

「ヒヒヒ、そつちの2人はあげるから、この子はうちが貰つてくれよ」

「今更そんな悪党な馬鹿がいるのか？」

「きいー！ なに素直に言つてくれちゃつてんだテメエ！」

ん？ この宇宙人じやないなさつきから小つるさい奴は。いまだに珠洲なんとかを口説いてるし。というよりこんな名もない少女2人を預かつたってなんの特にもなつたりはしない。いや、むしろ邪魔なんだけど。つか、お飾りじやねえのか、寿司の出前注文で寿司の見栄えを引き上げるあの縁のあれレベルを置いてくな。むしろ逆にしる。

「ヒヒヒ、僕を敵にまわしたな。無視するな！ 無視！」

「あ、なんだ。子供か」

さつきから小つるさいのがいると思つていたら足元に140代であろうか？ 低身長の背伸びしたヤンキーな格好をした少年が居た。いや、こんな真夏の場所に革ジャンつてなんだよ。とりあえずプリンセスが引き集めた視線は今度は俺と子供に注がれるよつになつた。

「ほら、子供が大人の集客戦争にかかわっちゃ駄目だよ」

とりあえず可能性を言つてみる。

「きいー！ 僕の挑戦へと受け取つた！」

あ、やばい。覚悟はしたつもりだけど地雷を踏んじゃった。プリンセスの目が痛い。俺が子供を馬鹿にしてるとでも思ったのか？いや、俺はこの偉そうなガキには極力かかわりたくないんだが、全員が傍観に入ってる状態じや俺がやるしかない。このまま渡してもいいんだが何をされるかわかつたもんじゃない、逆恨みとかされても困るし、学校側の男子にバレたら血祭りだ。

ここは見栄を張るしかない。

「迷子ですか？お母さんとお父さんと来たの？」

「あ、弟と…つて、違うワ…」

金髪宇宙人が礼儀よく頭を下げた。なるほど、寡黙な男らしい、たしかに手首を掴んだときこの男はなんも喋ってなかつた。つてか弟おおおおお！！！？ どう見積もつても俺より年上だぞ…？

「お、お前。本気で僕を怒らせたナ…」

勝手に怒つてるだけだろ？ なんて言えない。本格的に俺もおかしくなつて來た。

「15時にあるスイカ割り大会で勝負だヨ！ その可憐に子ちゃんを賭けて！」

な、なぜそうなる？

「わかりました。とりえず此方のお客様は貴方のとこを嫌がつておられるので、この時間は私たちでお接待させていただきます」

厨房からヌツと出て來た叔父さんがそう纏めた。は、はい？ ち

よ、ひょっと待ってくれ。

「しゅ、俊一……。わかつた其れを飲むヨ」

え？ なに？ もう、俺はわけわかんねえええええええ！…！

* * *

要約する。今日は丁度、浜でとある恒例イベントが行われてゐるのに重なつたらしい。それがスイカ割りの大会である。どんな大会かは後々に説明しよう。それに賭けられるのは賞金、さらには店のPRを大々的に出来るといふ。ようは海の家サイドからすると軍資金、さらには店の宣伝にもなつて死に物狂いで客を獲得するために来るものである。もちろん一般参加もあるのだが、大抵の優勝は海の家サイドが多いらしい。

そして、彼女らはしつこくプリンセスをナンパしてきた海の家と、彼女の命運をかけて争つらじい。

参加者は、俺一人。

「なんで俊一さんがでないんですか」

その戦闘能力なら余裕なはずだ。だがその反論はあつさり厨房の件で黙るしかなかつた。俺は明日の集客のために執り行われるこの大会のために作戦会議を俊一さん特性の焼きそばを食いながら行つていた。ルールは簡単なことにこの砂浜の各所に隠されたスイカを2人1組で探し出して、一人は隠しをし一人はスイカを探してま

わる。全12個隠されたスイカでいち早く駆けつけて指定された場所で割ればいいというも。

ちなみに男女ペアといふことで運動馬鹿の啓輔は頼れないと来た。
ともなれば腹を割るしかない。

「俺はその場所にいればいいのか？」

「うん。そうだね」

「でもスイカなんだろ叔父さん？ 店で買ったスイカを使われたらどうすんだよ？」

「スイカには毎年変わるシールが貼られてるんだ。それを審査員席に持つて行つて割つてはい终わりつてこと」

「へえ……それじゃあ誤魔化しが聞かないんだ。シールがついてないってことはとっても剥がれたら無効つてことだろ？」

情報を纏めるとそんな感じになる。

「で、大事なのはパートナーか」

「今この場にいるのは、古郷、凜、光坂……珠洲野か」

「あー、酷いな安里くん！ 珠洲守ですー！」

え？ そうだつたけか？ 夏休みに入る前は覚えてた気がするんだが……。

「あのー？」

「私たちは？」

おずおずと手を上げるのは恥もなき飾りたち。

「却下。いろんな都合で却下」

当然のことじで俺は却下した。約束の時間まで1時間。さて、遊泳禁止区域の砂浜を思い返す。範囲はけつこう広いぞ……？ そう考えると12個を砂に埋もれてるとしたら踏まないかぎり分からぬ。運と時間の勝負にもなる。こんな飾りに任せていたら負けてしまう。

勝負事だ、更には俺と（ついでに）店の評判に繋がるなら死に物狂いで勝たなくてはならない。むしろ勝たないと俺の命が俊一さんと母さんの手によつて摘まれてしまふ。そして摘まれた俺という名の花は学校で焼き殺される。身震いがする。

戦闘能力の良し悪しでいうなら凛であるが、コイツは完全に観戦する気がまんまだ。となると白ずとして3人が手を上げる。当然、残つた凛と飾りじや可愛そうだから凡人A、B以外の、古郷に光坂、そして

「そ、そうだ！ そもそもお前が元凶じやねえか！」

珠洲森（珠洲守です）である。

「あ、ひどーい！ そんな事を言つと先生にバイトしてたつて報告するよ？」

「うぐう

用意はしていたが、罰として補修組みと合流は硬い。

「…………協力してください」

「迷惑かけちゃつたし仕方ないよね」

「まあ、すずつちがそう言つならいいけど」

自体が丸く收まりそうな中で、一人だけ下を俯いてるのが居た。

古郷……？

和気藹々となる中で、そうだ、コイツはいつもこんな感じじゃなかつたか？ 説教癖が強いのは俺ばかりで普段はこういう中では随分と大人しい奴だった。ずいぶんと忘れてるもんだな。自分でもビックリした。まだ直つてない、いや……変わつていなか？

「わ、私」

「はア……」

俺はプリンセスにチョップをいた。誰もが口をあんぐりとさせらる中で俺は言ひ。

「お前はそこまで自己表現が激しいのか？　おお、恐ろしいことこの上ない。そこまで自分が目立ちたいのか？」

「え、いや……別に」

「そうやって観衆の目を独占させてなにが楽しい。そもそも今のお前は賞品で参加資格はない」

「えー」

「ふーたれるな。俺でも結構、不安なんだぞ。バイトがバレたら大変だつて。だけど、これは仲を戻すいい機会だ。このもやもやしたのを引きずるわけには行かない。俺は突拍子もない俺の行動に呆けてる古郷の手首を掴んで引き寄せる。

「最強団、再結成だ」

そう。俺と古郷が幼稚園時代2人で作った秘密基地のさいに作ったチームの名前だ。このネーミングセンスは過去の俺であろう。俺

は全員の珍獸を見るよつな目を耐え抜いて立ち向かう。

「え、えっと？ 懐かしいね？」

「そうじゃないだろ……」

俺はがつくりと肩を落とす。まいい、決戦に臨むだけだ。

* * *

開始から5分が経過する中で俺は戦っていた。理由は単純だ慎重に砂浜に気を配りながらスイカを探してるのだ。エントリー直後。俺は古郷にある交渉をした。それは簡単だ、割るほうと探すほうの交代。こうやって探すのは体力があるほうが兼任だ。あのちっこいガキは俺が探す側だと気がついたのはエントリー後、やつのちょっと待てとか言う姿はこつけいであった。

参加者は20人ちょっとと、海の家の精銳たちに紛れながら参加する。掘り返されたような痕があるがたまに其れがハズレとかかれた紙がでるケースもある。探す場所がバラけている、誰もまだ見つけてはいないのである。とはいっても、油断はできない。特にこの海の家の精銳たちは他との絶妙な距離を保ちながらいつでも奪える覚悟をしている。やっぱし、古郷に任せないでよかつたか。

つたく、砂浜がウザいし日光が痛い。

じつする？

今、一番怪しいのはあの岩場だ。つっても足場が悪い岩場で戦え

る自信はない。それに一般参加の連中も捜して見つかっていないんじや……そりいえば、海にも足をいれてる連中が居るな……。まさか、波打ち際にもあるのか……？　たしかにその可能性も考えられるがあつても掘り返された場所もわからないし掘つてもすぐに波で埋まるから地味な作業だ。

岩場か……。

「なんで俺がこんな田に」

文句を言つても仕方ない。俺はすり足で歩く。せめてヒントになるようなものがあればな……。なんでありそうな岩場に海の家の連中がいないんだ？　適当に捜してると違つて血眼に獲物を定めながら自分の獲物を狩つとする魂胆が見え見えだ。

なんだかんだ言つても、今まで仲良くしたた奴に絶交を言われたんだ。今思えば情けない事をしたと思つ。あの思春期の不安定な時期に俺は本当に古郷が邪魔だつたわけじゃない。ただ、変に意識し始めたからだ。光坂に何となく惹かれてから、その関係と勘違いが邪魔になつた。

別に光坂が気にするような奴じゃないって分かつてた。

情けない俺の戒めは俺が解くしかないんだ。仲直りつてのは意外と大変なものだ。あいつのために仲直りするんじゃなくて情けない自分との決別だ。そこで、今まで溜め込んでたものをちゃんと書いておこうか、光坂に。なんだかんだかでのバカに流されて有耶無耶になつたが……俺つて節操ねえな。

「なんだ、あのまんまより、こっちのが楽しいじゃんか」

単純な話だつた。オマケにプリンセスとも適当に遊んで駄田亭主になつてやつてもいいかもしない。そのタメにはあいつらに勝たせるわけにもいかないわけだ。最低限、やつの優勝を抑える。それで、勝負は有耶無耶だ。でも、負ける気はしない。

なんか、そんな気がする。

だから岩場に俺は脚を運んだ。波がけつこう強く打ち付けてる波打ち際、波が引くときにサッカーボールのはいつてるネットのようなものがあるのが見えた。岩に紐が括り付けられてるのか動く気配はなく、波はそれりに強い。この足場が悪い場所でそんな紐を取つての作業なんかしてたら岩に激突しちまつた。

確かにこれは避けるわけだ、いかにもな場所にあるのは取れない証拠。だが裏を返せばこの場所にあるということは誰かが仕組んだんだ。日中からこんなスイカを隠してたら密にバレてしまう。隠すなら一時に遊泳禁止区域とその砂浜を立ち入り禁止にした14時からの一時間。塩の満ち引きじゃないなら……方法はあるのか？ いくら手が長くても最短距離でも手を伸ばしても届きそうにない。

しょうもないトリックで立ち往生させやがつて……岩場の陰から様子を伺う。発見した騒ぎにはなつてはいない。ともなれば…… やるしかないか。ネットを見据えて俺は ！

つたぐ、運命の女神様つてのは最初からこのつもりだったのかと疑いたくなる。もし今日来たときに感じた漠然とした古郷と仲直りするか？ つてそんな意識はこれをやらせるためか？

いや、どうだつていい。あんたは俺に見かたしてくれたんだ結局

の所。感謝してるんだぞ？ これでも？

ただ、これ以上めんどくさいのはお断りだ。

手に持つた捨てられたビニール傘に確かな手^レたえを感じる。フレイクなんかじゃない、上手くシールがぶつとんないことを探りながら傘で引き上げると、紐がフックになにかに掛かつてたらしく簡単に取れた。てっきり序ロツクかなんかだと思ったが、それだと無謀かそりや。

波もそれなりに強く打つのによく割れなかつたな？ あ、いやこれは編み方に細工してある、殆どスイカを包むような段階で持ち手の部分がない。

「よし」

打ち上がつてた錆びた傘をみつけたのは偶然。ビニールの部分が丸ハゲになつて錆びてた傘が運良くあつた。毎年ここにこついう形で存在した怪我なくてはとれないスイカの匙を投げていた連中が、つまるところ海の家の連中が探してたら簡単に取つてただろう。それぐれい注意を払えば見つかるような少し岩場の陰になつっていた。運命の女神つてのは、今回ばかりは味方らしい。

「わりいが、地元人あまくみんなよ？」

* * *

「まつたく、海から出でてくるなんてビックリしたぞ」

「遊泳禁止区域だつたんだぞ？」一步間違えたら

「兄貴無茶しすぎ」

「そーんなにすずっちは愛しいのか？　ん？ん？」

「まあまあ、賞金はなくなつてもP.Rはできたでしょ？」

適当なことを言いやがる。結局は優勝は俺でもあそこでもない別の参加チームであった。兄貴といさんと背中に書かれたタンクトップを羽織つてのキンヘッドの一般だつた。その少し後に海中からばれぬように移動していた俺がバカみたいただ。

俺は苦笑いを浮かべたままの古郷に近寄つて近くの椅子で腰を落ち着かせる。

「優勝する氣だつたんだけどなあ……」

「え？」

話しかけられてすつとんきょんな声をあげるバカを観る。

「『幼馴染』がタッグを組んでも負けるとはブランクは大きいな」
『お』

置いてけぼりになつたプリンセス以外が目を白黒させる。

なんか、俺が泣かせたみたいで悪人役を買つたのはいつまでもないことだ。

むくわれねえ……。俺の努力つてなんだよ。

* * *

結局あの海で一躍うちに海の家が優勝組が一般参加だけあって持つて帰つてき、かつあんな登場をしたために噂をききつけ足を運んだ客の中に先生も混じついて俺らは仲良く、補修組と合流していった。

「ううう……。なんで私までえ」

そんな文句を呟く珠洲森を尻目にダブルソーダバーの半分を咥えながら適当に相槌をうつ。頷いてるだけであるが直訳すると『俊一さんの手伝ってくれつて誘いを断らなかつたお前が悪い』と言つ。

「あー、結局は自分の責任だつてえ？ ひどいよー！」

わかつておられたか。

「でも結局さ、なんでお前は俺とか宗介に普通の男子とは違う接触してたんだ？」

「ははは、それは2人が私の王子様だからだよ」

は？ なんていい返すべきか迷つた俺は悪戯っぽそくに笑うプリンセスからの答えは望めなかつた。コンビニを後にしたあとで俺は宗介にメールを送つた。返答は覚えてないとのこと。尋ねたことはわかつてのとおりだと思つ。

俺はこの日、親と離れた家族連れできていたらしい少年と、幼馴染と喧嘩をした少年が仲良くなる夢を見た。そして大人たちが気を失うのを待つている間に痺れを切らせた2人の少年が暴れる少女を命ながら助け出すというドラマのような夢を見た。

……プリンセスの魔力。つてことかな？

これは、俺の胸のうちに秘めておこう。さあ、今日は夏休み明けで新学期。

なにかを期待してもかまわねえだろ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5451n/>

the Summer Sea Sky

2010年10月9日06時49分発行